

副島隆彦著「余剰の時代」ベスト新書 KK ベストセラーズ 2015年3月20日刊を読む

### 生き延びる思想—デモクラシーとは—

1. デモクラシー democracy の語 <sup>エティモロジー</sup>源をはっきり書くと、デーモス・クラティア demos-kratia だ。デーモス(民衆。ホイポロイ hoi polloi。貧乏人大衆。ピープルのことだ)によるクラティア(クラシー。体制、支配秩序)のことだ。
2. 日本人は、デモクラシーを「多数決の原理」とか言って、これしか知らない。それだけに短絡させる。49対51だと、51のほうが勝ちだと、このことしか本当に知らない。そうじゃないのだ。
3. デモクラシーというのは、貴族や大金持ち(これが市民<sup>シチズン</sup>)たちではない、貧乏な民衆、庶民、大衆に、選挙権を一人一票ずつ与えて、多数である民衆の意思に従った代表者たち(リプレゼンタティブズ representatives、代理人)を選ぶことだ。そしてこの代理人、代表者が政治家、国会議員であって、さらにそこから選ばれたのが内閣<sup>キャビネット</sup>で、実力政治家(大臣)たちの集まりだ。
4. 日本では、その内閣を「総理<sup>プレザイド</sup>する大臣」のことを首相という。この代表者たちにパウア(権力)を与えるということだ。そして、ある程度好きなようにやらせる。そしてそれがダメだったら、引きずり下ろす。そしてもう一回選挙をやって入れ替えるということ。これがデモクラシーの本当の定義だ。
5. 家柄とか、王様とか、天皇とか、そういう特別な人たちの権力を認めないということだ。昔は<sup>アリストクラシー</sup>貴族制度だったから、貴族の代表が政治をやっていた。独裁者<sup>ディクテイター</sup>が出てきたら独裁者が政治をやる。「そんなのは認めない」と言いだして、あくまで国民、大衆、ピープル、簡単に言うと貧乏な大衆の代表者たちに権力<sup>ソブリンティ</sup>(国家主権)を握らせる。
6. 庶民はシチズンではない。市民<sup>シチズン</sup>というのは、ある程度、富裕な金持ちたちのことを言う。庶民と市民は違う。「横浜市民、町田市民」などと本当の市民は違う。ピープルは一般庶民、貧乏大衆だ。彼らが選挙で多数意思で政府をつくる。そして、それが取り替えられる、というところに、デモクラシーの本質がある。
7. アリストテレス(紀元前384-紀元前322)が、今から2400年前に、「最善の政治形態(統治形態)は、デモクラシーとオリガーキーの混合形態である」とはっきり書いている。『ポリティカー(政治学)』という本でだ。どういうことかということ、デモクラシーだけやらせていると、よくない。衆愚政治<sup>しゅうぐ</sup>になってしまう。
8. やはり、ずば抜けて優れた能力を持った3人ぐらいの人間たちに国民の信頼の下で政治をやらせるといっていい。護民官(トリビューン)と呼ばれたり、独裁官(ディクタトーレ)と呼ばれたり

した、都市国家シティステイトの優れた人間たち、3人ぐらいで政治をやった。三頭政治とも呼ばれて、オリガキーともいう。ごく少数者たちによる寡頭かとう支配と訳す。

9. たった一人の独裁者の支配ではダメだ。彼ら数人のオリガキー *oligarchy* の支配の良さとデモクラシーの良さを折衷せつちゅうした混合形態が一番いいと、アリストテレスが2400年前に書いているのだ。私はこのことを自分の先生である小室直樹先生こむろなおきから教わった。だから、デモクラシーが最善で一番いいというわけではない。アリストテレスは書いている。

10. (1)……最善の国制は何であるか。また国々や人々の最大多数のものにとって最善な生活は何であるか。(中略)

……徳とは中間にあると言われるが、これが正しいならば、中間の生活が(最大多数の人々にとって)最善の生活になることになる。(中略)

(2)だからして国という共同体にしても、中間的な人々によって構成されたものが最善である。そして中間的な部分が多数で、出来れば、その両端の部分より強力であるのがよい。中間の部分(中産階級)が他の部分より強力であることがよい。(というのは他の部分に中間的な部分の重さが付加されることによって釣り合いが変わる。それによって両極端[極端な民主政と極端な寡頭政かとう]が生じるのを防げるからである。)このような国々に善き政治が行われるだろうことは明らかである。

(3)それ故に、政治をする人々が、中間層の人々が生活するのに十分な財産を有させるということはこの上もない幸いである。というのは特定の少数の人々が非常に多くのものを所有しているのに、他の人々は何一つ所有していないところでは、極端な民主政か、生粋きんすいの寡頭政、あるいはこの両方の極端な考えを通じて僭主政デュラニスが生じるからである。

(4)僭主政は非常に血気盛んな民主政からも、また意気盛んな寡頭政からも生じてくる。しかし中間層がしっかりしている国政やそれに近い国政からは僭主政(隠れた独裁制)が生じてくることは遙かに少ない。

(アリストテレス『政治学』山本光雄訳、岩波文庫、1961年、第4巻第11章から、一部改訳)

11. このようにアリストテレスが、最善、最高の政治形態は、民主政治デモクラシーと寡頭政治オリガキーの混合形態だ、と今から2400年前に書いているのだ。日本人の知識人層も、そろそろこの世界基準の偉大な理論を知るべきだ。2400年前にすでに言われている(発見されている)のだ。

P194 ~ 198

[コメント]

デモクラシーの本質とは何か。副島隆彦先生の御説明は極めて明快だ。この考えに立ち戻って、日本の政治をゼロから考え直したい。

— 2015年5月16日 林 明夫記 —